

## 研究・調査報告書

報告書番号	担当
205	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門
題名 (原題/訳)	
The association between alcohol consumption and contact sensitization in Danish adults: the Glostrup Allergy Study. デンマークの成人における飲酒と接触性過敏症の関連 : the Glostrup Allergy Study	
執筆者	
Thyssen JP, Nielsen NH, Linneberg A	
掲載誌 (番号又は発行年月日)	
Br J Dermaol. 2008;158:306-12.	
キーワード	
alcohol consumption, contact sensitization, logistic regression analyses 飲酒、接触性過敏症、ロジスティック回帰	
要 旨	
<p>目的 :</p> <p>住民ベースの疫学調査において飲酒と Ig-E 型免疫疾患 (アレルギー性鼻炎、喘息、蕁麻疹) に関連があることが示されてきた。またこれらの結果は数々の免疫学的な検証からも強く支持されるものである。さらに飲酒の遅延型過敏症を抑える効果は健康な対照群においても示されている。しかし接触型過敏症と飲酒の関連については一般集団において報告がなく、本研究において検討することとした。</p> <p>方法 :</p> <p>1990 年デンマークの Glostrup において 15-69 歳を対象に住民ベースの横断研究を行い、1112 人において自己申告の飲酒量とパッチテストの結果が検討された。1998 年フォローアップの為同じ人が集められ、734 人が再度検査を受けた (参加率 : 69.0%)。ロジスティック回帰モデルを使用し交絡因子を調整して解析が行われた。</p> <p>結果 :</p> <p>飲酒しないと答えた女性において 8 年の経過観察後最も接触型過敏症を呈するようになる傾向にあった (調整オッズ比 2.12(95%信頼区間:0.98-4.61))。女性ではこの傾向は有意であった (<math>p = 0.045</math>)。</p> <p>結論 :</p> <p>これらのデータはアルコールが遅延型過敏症よりむしろ Ig-E 型免疫疾患を惹起するという説を支持するものである。また飲酒は接触型過敏症を防止する作用がある可能性がある。疫学的研究がさらに必要である。</p>	